NPO
宮崎市

宮崎から恩返し。唐桑の空家を拠点に陸前高田市、気仙沼市を支援

石田 達也 NPO法人宮崎文化本舗　代表

取材日　2011.8.17

映画を中心とした芸術文化のまちづくりと、市民活動団体の事務局代行事業を実施。大震災後は被災地（陸前高田市・気仙沼市）を支援するため、復興支援および復興共創を行うプロジェクトチームを発足させた。九州、中国、四国の協働体制による東北大震災復興支援ボランティアや、復興共創インターシップ派遣プロジェクトなどを展開する。

3月11日　14時46分

大きな地震が起きた事は職場がある宮崎で、ニュースで知った。テレビとインターネットで次々と情報が入ると、どこまで被害が広がるのか、被災地とはまた違った恐怖感、死者・行方不明者が多数出ている状況で何かしたいが遠くにいてどうにもできない悔しさを感じた。

T－ACT設立

宮崎は去年、口蹄疫、新燃岳噴火と度重なる災害が発生し、全国から支援を受けてきたので、「みやざき」からの恩返しをしたいと常々考えていた。震災後、東北で被災された現地の人と共に立ち上がることを最大の目的に、T-ACT(東北で行動する)を設立した。
4月に視察のため被災地へ入った。被害の規模が大きすぎて、何をすればよいのか途方に暮れた。とにかく時間はかかるだろうと思った。国、自治体、何もかもが混乱していて、「もう少しうまくいかないのか」ともどかしさを感じた。

現地での活動

長期にわたり1箇所で支援をしたいと思い、ボランティアの減少が予想されていたGW後に被災地へ入り支援活動を開始した。長い期間の支援活動を想定していたので、唐桑町の空き住居を借り、拠点を構えた。
T-ACTには常時6名から18名のボランティアがいて、瓦礫の撤去のため陸前高田や大島へ向かう班と、町づくり班の2班にわかれて行動をした。町づくり班は地域の話し合いに参加し、地元の人々との関係性をつくり、地域に何を残せるのかを考え、最終的には町で夏祭りを開催することを目標とした。しかし、町の人々の大半が今年は祭りを中止にしようと言っていた。ところが日が経つにつれ、地域の人の気持ちにも変化が見られた。開催に向けて前向きになっていった。

最初は信頼できる人間なのかと、地元の人々の警戒心が強かった。けれども活動を続けるうちに警戒が理解や信頼へと変わっていった。地元の住民から支援要請を受けるようになり、自宅に招かれ、食事を共にしながら、いろいろな話も聞けた。漁師さんからは大震災当日の、大津波から間一髪逃れた話も聞いた。メディアでは伝えられないような、緊迫した状況が手にとるようにわかった。時間が経つにつれ、地元の人々と心が打ち解けていったのが嬉しかった。

唐桑夏祭り開催

初めて唐桑の地に足を踏み入れて3ヶ月。まさかこんな盛大に祭りができるなんて夢のような気持ちだった。夏祭りは午後1時~午後8時の花火大会までの長丁場。夜の点灯式で使用するキャンドルボール作りワークショップは材料がなくなるほどの盛況ぶりだった。宮崎の木材業者の方には無料でキャンドルを飾る献花台を提供していただいた。
夏祭りは大変盛り上がり、地元の方々が喜んでくれたのが一番嬉しかった。
　地元の人が元気になるきっかけをつくることが最終目標であったので、ある程度は達成できたように感じている。

出船おくり

8月17日には、5カ月ぶりに漁に出る漁師さんを送りだす出港式を、総勢60名で行った。
出港の際に色鮮やかに染め上げられた大漁旗が掲げられ、家族や関係者が色とりどりの紙テープと軍艦マーチで、航海の安全と大漁を祈りながら見送った。市内のホテルの女将さんらでつくる「気仙沼つばき会」の皆さんも揃いの衣装でお見送り。長い航海に向かう船員さんたちを笑顔で激励する姿、「いってらっしゃい!」と手を振り続ける姿に、どこか胸にくるものがあった。

震災をふりかえり

気仙沼で支援活動をしているボランティアは、ほとんどがテント生活だった。我々は長期間にわたる支援活動を目的にしていたので、畳のある拠点を確保できたのは本当によかったと思う。
日本は今まで、経済を優先する生き方をしてきたが、生き方や信念を見直す機会をつくらなければ、今回犠牲になった方々にも申し訳ないと思う。次の時代をどう築いていくか、私たち日本人全員が試されていると感じている。
この大震災を、ライフスタイルを見直すきっかけにしていきたい。1人でも2人でも、住民の心の中に今回の支援活動が残ってくれたらいいと思う。

撮影：2011.8.17　大震災後5ヵ月ぶりの出船おくり

大学
三沢市

ボランティアを支えるためのボランティア、組み立て式風呂の支援。

相馬 孝 小川原湖自然楽校　代表

取材日 2011.10.20

小川原湖での自然体験を通しての環境教育を目的に、自然体験活動や自然体験活動指導者養成に取り組む。震災後はRQ市民災害支援センター・登米現地事務局の立ち上がりから震災ボランティアとして関わる。自らのボランティア経験から支援活動に従事するボランティアのための支援が必要と考え、活動環境を整備するなど裏方支援を行った。

3月11日　14時46分

弘前で亡くなった叔母の通夜の準備をしていた。大きく揺れたが、恐怖を感じるほどの揺れではなかった。ただ、横揺れがずっと続いたため今までの地震とは違うと感じた。
青森でもすぐに停電になり、雪も降り、暖房もつかない中、ロウソクだけで通夜を取り行った。翌日は地元に戻り、13日に電気が回復した。テレビなどを通してだんだんとあちこちの被災状況が明らかになるにつれ、これは大変な出来事が起きていると思った。
野外活動に取り組んでいる手前、ライフラインがとまっても生活に支障はなかった。
皆は電気の生活に慣れてしまっているため、ストーブもファンヒーターなどを使っている家庭が多い。12日の夜に帰って来た時、「ストーブがつけられなくてとても大変だった」という話を聞いた。自然楽校にはストーブが4つあるので、ランタンと一緒に貸し出した。
水も止まったがペットボトルのとりおきもあり、冷蔵庫の中には常時1週間ほどの食糧が入ってい